

氏名	鄭 炳蜜
学位の種類	博士(美術)
学位記番号	第99号
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
論文題目	漆を用いたパブリックアート —日本と韓国における現地調査を中心に—
審査委員	主査 教授 栗本 夏樹
	教授 吉田 雅子
	教授 塚田 章
	教授 長谷川 直人
	准教授 笹井 史恵

## 論文の要旨

筆者は従来の漆に対する印象、すなわち伝統的なもの、縁遠いものというイメージを払拭して漆の新たな可能性を提示したいと考え、現代的な感覚を反映させた漆作品の制作を目指している。これまで漆の実用的な側面に多く接してきた人々に対して、漆には従来の使用方法以外にも様々な可能性があること、より身近なものとして活用し得るものであることを示す一つの方法として、パブリックアートに漆を取り入れたいと考えた。

そこで本論ではまず漆の成分、素地の種類、漆の加飾技法などを整理し、現代の漆工芸の活用例を調べた。そして、パブリックアートを「公開されている場所で特定の人々ではなく一般の人々が鑑賞し楽しむアート作品」と定義づけ、その制度や機能に関して整理した。

パブリックアートの機能は以下のように分類できる。設置場所の特徴を表す象徴的機能、鑑賞者の知覚や心理に審美的に訴える審美的機能、座ること・照らすことなどといった実用的機能、建造物の重圧感や無機質な空間を和らげて人々に親近感を感じさせる環境調和的機能、衝立などのように空間を仕切る空間区画機能の5種である。

筆者は以上を踏まえた上で、実際に現在設置されているパブリックアートを現地において調査し、漆以外の作品と、漆の作品の二つに分けて、その結果を報告した。まず漆以外のパブリックアートに関して、日本で12件、韓国で6件調査した。これらのパブリックアートには象徴的機能、審美的機能、環境調和的機能が良く発揮されているが、実用的機能や空間区画機能を有したものは、筆者が当初想像したより少なかった。

次に、漆のパブリックアートを日本で14件、韓国で5件現地調査を行った。また、来日していた制作者へのインタビューを通して、アメリカに設置されている1件のパブリックアートの情報を入手した。その結果、東端唯、栗本夏樹、田中信行の3作家が特に重要であると考え、3作家の作品に関してさらに調べた。

調査した漆のパブリックアートの中には、空港のVIP室やホテルのスイートルームなど、一般の人々が自由に入出入りできない場所に設置されているケースもあった。今後は駅、空港、ショッピングセンターなど、一般の人々の目に触れる場所に設置する機会を増やすことが望まれる。調査作品は、立体作品よりも平面作品が多かった。平面作品は通行の妨げにならず、制作時間が比較的小さいのがその理由であろう。しかし漆の特性を發揮するには、単なる平面ではなく半立体にし、漆ならではの加飾の魅力を最大限に利用することが有効だと筆者は考えた。また、現在は木材を素地にしたり、乾漆技法を用いるものが多いが、今後は金属やガラスなど様々な素地と組み合わせて造形の可能性を探る必要があると考えた。そして、先述した5つの機能に関して考察すると、筆者が調査した作品の多くは審美的機能と環境調和的機能を有していた。しかし、象徴的機能、実用的機能、空間区画の機能を有している作品はわずかであった。漆のパブリックアートの中に象徴性をさらに組み込んでいくことが、今後は必要だと筆者は感じた。また、多くの作品はメンテナンスに問題がある事が判明したため、管理に関しても考慮する必要があることも明らかになった。

さらに、コミッションワーク会社にインタビューした結果、以下が判明した。以前パブリックアートは主に野外に設置されていたが、現在は飽和状態で、設置の需要が室内空間に移っている。また今後は2020年東京オリンピックに向けて、宿泊業界からの発注が増加すると見込まれる。さらに現在は「和のモダン」の雰囲気社会的に求められつつある。室内への設置に適しており、和風伝統美との結びつきが強い漆を用いて現代的感覚のパブリックアートを制作することは、今後の社会的需要にまさに合致している。

今後は作家がコミッションワーク会社や顧客の要望を一方的に聞くだけでなく、作家の方から積極的に提案していくことも重要ではないかと筆者は考えた。例えば、作品の契約期間を定めてレンタルすることや、ホテルのドアや取手などインテリアの一部に漆を直接組み込むような提案も有効だろう。

最後に、筆者の作品を2種に分けて解説した。第一はインテリアのための作品、第二はパブリックアートを前提とした作品である。第二の作品のうち代表的なものは、2018年に韓国の平昌<sup>ピョンチャン</sup>で冬季に開催されるオリンピックのメイン・プレスセンターに設置することを仮定した作品である。オリンピックのスローガンである「一つになった情熱」は、世界各国の選手の努力と情熱が集まり一致団結することを意味している。それを象徴するために、小さい結晶が集まって形成された大きな氷壁を制作モチーフとした。制作は分業方式をとり、筆者はディレクターの立場で制作プロセスを統括した。原形の制作は木工作家に依頼し、半立体の形態をとった。漆を扱う工程は筆者が作家の立場で制作に加わり、伝統的螺鈿をはじめとする様々な技法を組み合わせ、レーザー加工機も利用した。筆者はテレピンを垂らしたり、錆上げを厚くしたり、マスキングテープを利用するなど、様々なテクスチャーを作って新たな表現を追求し、審美的機能を高めた。このような作業を通して生まれた作品は、無機質なメイン・プレスセンターの緊張が走る空間を和ませ、環境を調和する機能を果たすものと期待される。

このような制作を通して、筆者が今後特に重要だと感じたのは、以下の三点である。第一は新たな技法を創出し、従来の技法と多様に組み合わせ、様々な表現を追求することである。第二は分業制作などを通して、異分野の専門家の技術や考え方を多様に組み合わせることである。第三は先端

機器を積極的に活用して制作することである。今後もこのような点を念頭に置き、漆を用いたパブリックアートの新たな可能性を追求して行きたいと思う。

本論文を通じ、漆作品に関心を持つ人々が増えることを心から望んでいる。公共の場で現代的感覚の漆を用いたパブリックアートに接する機会が増えれば、漆の様々な魅力が人々に伝わり、漆作品が一層身近になっていくであろう。漆を利用したパブリックアートの分野が活性化し、私たちの日常がさらに豊かになっていくことを待望している。

## 審査結果の要旨

鄭炳蜜氏の博士課程・本審査は12月8日の午後3時15分から行われた。発表タイトルは、「パブリックアートとしての漆の活用—日本と韓国における現地調査を中心に—」である。合わせて一週間、作品展示も産業工芸意匠の部屋で行われた。

ジョン氏の研究は、現代生活の中で居場所を失いつつある漆を、新たな方法で活用することで漆の新しい居場所を創出しようとする試みと言える。具体的には、漆を素材とした造形作品を公共空間などの建築空間に活用し、漆を一般の人々にもっと身近に感じてもらい、新たな漆の可能性を広げる研究である。

ジョン氏は、修士では漆工を学んだが、現在の博士課程での専門領域は産業工芸意匠である。本研究は、造形作家としての立場とデザイナー的な立場を併せ持つ仕事であるコミッションワークの研究でもあり、産業工芸意匠領域で研究をすることでデザイン領域の先生にも指導を仰ぎながら研究を進めてきた。

ジョン氏の研究方法としては、調査と考察、それを生かした実制作の三本の柱で研究を進めてきた。具体的には、日本と韓国のパブリックアートの現状調査を行った。初期の段階では、すべての素材を対象に調査を行い、続けて、漆を用いた日本と韓国、アメリカのパブリックアートの現状調査を行った。アメリカの事例は、タイミングよく、本学の客員研究員として来日されていたニャット・トラン氏に直接インタビューをすることができた。もう1つ大切な調査は、パブリックアートの制作に携わっている会社の中から大手三社の幹部社員にインタビューを行った事である。事前に質問事項を伝えた上で、東京のオフィスに彼女が出向いてインタビューを行った。そのことでコミッションワークの受注、制作、設置、メンテナンス等の詳しいプロセスや考え方、現在のパブリックアートの動向などを詳しく知ることができた。

ジョン氏の博士課程での実制作としては、それまでの調査や考察を生かして、韓国で2018年に開催されるピョンチャン冬季オリンピックの関連施設に設置するという仮定の下に「結晶で一つになった情熱シリーズ」、「冰山Ⅰ～Ⅲ」、「流水Ⅰ～Ⅲ」の合計7点を制作した。これらの7作品は、今回、産業工芸意匠領域の部屋で展示されていたものである。これらの作品は、ピョンチャン冬季オリンピックが地球環境保全を重要なコンセプトとしていることに着目し、地球の環境汚染が進んでいる状況を冰山や流水をモチーフに表現している。これらの作品の中には、螺鈿・蒔絵・変わり塗りなどの加飾技法がふんだんに使用され、氷の結晶や雪が解ける様子、氷の表面の表情などが多彩に表現されていて説得力と共に見応えのある作品となっている。

本審査に向けて制作された作品「結晶で一つになった情熱シリーズ」は、ピョンチャン冬季オリンピックの際、メイン・プレスセンターとして使用される予定のアルペシア・コンベンションセンターに設置する仮定の下に制作した作品である。ピョンチャン冬季オリンピックのスローガンは、「一つになった情熱」であり、「結晶で一つになった情熱シリーズ」は、小さい結晶が集まって形成された大きな氷壁を制作モチーフとすることで世界各国の選手の努力と情熱が集まり一致団結することを象徴的に表現している。ジョン氏の作品の大きな特徴として、多様な技法を組み合わせた加飾が上げられる。具体的には“蒔絵面にテレピンを垂らした滲み表現”“錆漆を用いたテクスチャーの表現”“マスキングを用いた

斜線表現”“螺鈿を用いた輝き表現”などである。また、加飾部分と塗りのみの部分とをバランスよく作品に共存させることで、加飾だけでなく漆本来の塗りの魅力も同時に発信している。パブリックな空間で、この作品に出会う人々が漆の多様な魅力を感じることができるよう配慮されている。この作品は、人で混み合うことが予想される施設であることを配慮してレリーフ状の壁面作品としてデザインされている点も重要なポイントである。

今回は、作品が大型であることや、作業の効率化も配慮して専門の木工工房に木地制作は発注を行った。制作過程をすべてアーティストが一人で行わず、制作の一部を分業することで、制作時間の短縮や高い完成度の確保を目指している。

審査教員からは、次の様な意見が述べられた。

まず、論文については、

「本研究は日本と韓国で現地調査を着実に重ねながら実施された。特に制作者、コミッションワーク実施者への取材によって得られた情報が的確に分析・研究されている。」

「漆を素材とした作品によるパブリックアートに関して系統立った研究がほとんどなされておらず著述された資料がない中で、独自に現地に足を運びその現状を調査研究し報告されたことは賞賛に値する。」

「現状調査からコミッションワークの存在に着目し論じているが漆によるコミッションワークを掘り下げた研究は従来には無くその意味でも貴重な研究と言える。」という肯定的な意見とともに、

「漆芸作品によるパブリックアートが抱える問題点の報告とその対処についての意見は書かれてはいるが、全体としては現状をレポートした報告と著者の感想にとどまっており貴重な報告ではあるが、独自の視点や新たな知見の提示があるとは言いがたいところが残念である。」という厳しい意見もあった。

作品については、

「実制作の作品は説得力が在って作家としての研究成果が認められる。依頼主からの要請を前提に制作される漆工作品のパブリックアートとしてのこれからの在り方を研究したものとして十分に課程博士のレベルは担保されている。」

「新作の半立体の作品は非常に見応えがあり、彼女の本研究の集大成に相応しい作品である。様々な漆のテクスチャー表現は、漆の可能性を感じさせてくれるものになっている。」

「“結晶で一つになった情熱”はダイナミックな氷柱の重なりが力強く心地よい秀作であった。設置上の安全性を考慮して手前への張り出しを抑制したようであるが、設置場所の状況を配慮すればもっと大胆な表現が可能であったと思われ、少し残念な点が残るが、平昌冬季オリンピック関連施設への装飾作品としては清々しい良い作品であると評価する。」など高い評価を得た。

以上の様な意見を総合的に判断し、審査教員全員一致で、鄭 炳 蜜氏の博士課程・本審査を合格とする。